## 属人区長の手紙 (2018年1月9日) 自由について

## PDF>属人区長の手紙(2018年1月9日)

\* \* \*

愛する皆さんへ。イエスが私の子供 たちを守ってくださいますように。

1.ここ数ヵ月の間、総会の方針に 従ってしばしば自由について言及し てきました。今、この手紙では、生 涯にわたり自由を愛した聖ホセマリ アの教えに沿って、この神の偉大な たまものについて考えたいと思いま す。聖ホセマリアは、「子どもたち よ、私は倦むことなく繰り返しま す。オプス・デイの精神にとって最 も明らかな特徴の一つは、自由と理 解を愛することです| [1]と書き記し ています。この言葉を読み返し、黙 想するにあたり、神に感謝しないわ けにいきません。と同時に、この言 葉を自分の生活において実践するに は、どうすべきかを、各々、神の恩 恵の助けを受けて検討しましょう。

こうして、一人でも多くの人が「神の子供たちの栄光に輝く自由」(ローマ8,21)に与ることができるよう助けるために、よりよい準備ができるでしょう。

人々と国々が自由を熱望し、自由を 要求するということは、私達の時代 の肯定的なしるしです。人間一人ひ とりの自由を認めることは、誰もが 人格を持つ人間であることを認める ことです。すなわち、各々が自らの 行為の主人・責任者であり、自らの 生き方を定める能力があることを認 めるのです。自由が各々に備わって いる最良のものを常に発揮させると は限りませんが、自由の重要性は幾 ら強調しても足りません。自由がな ければ、愛することができないから です。

多くの場所で真の自由に対する大き な無知が広がっています。とても残 念なことです。制限のない空虚な自

由を追い求め、まるでそれが進歩の 究極目的のように考えられることが あります。その一方で、悲しむべき 様々な抑圧や、自由に見えるものの 実際は人間を隷属させている鎖があ ることを嘆かないわけにはいきませ ん。いずれも、遅かれ早かれ虚しい ものであることが明らかになるで しょう。教皇は書いておられます。 「神から離れていれば自分は自由だ と考える人もいますが、彼らはいつ でも帰ることのできる家を失った、 孤児のような生き方をしていること に気づいていません。旅する者であ ることを止め、さすらい人 | [2]と なっているのです。

自由を得るために召し出された

2.私たちは、「自由を得るために召し出されたのです」(ガラテア5,13)。創造の御業自体が神の自由の表われです。創世記の叙述は、創造における神の愛、自らの善と美を世

界に伝える時と(創世記1,31参照)、 人間に自由を与える際の(創世記 1.26-29参照)、神の喜びを垣間見せ てくれます。神は私たち一人ひとり に存在を与えるにあたり、私たちが 善を選び望む能力を、そして神の愛 に対して愛をもって応える能力を与 えてくださいました。しかし、被造 物としての限界により、私たちが神 から離れてしまう恐れもあります。 「《ご自分の像、似姿》(創世記1,26 参照)として人間を創造するにあた り、神が人間に自由を与えるという 崇高な《危険》を望まれたことは、 神的知恵の神秘です」[3]。

実際、この危険は歴史の始まりから、原罪による神の愛の拒絶となって現れました。こうして、善に対する人間の自由は弱まり、意志は罪に傾くようになってしまったのです。その後、個人的な罪によって自由はますます弱くなり、罪は多かれ少ましかれ隷属状態を示すようになりまし

た。(ローマ6,17.20参照)。しかし、「人間はいつも自由であり続けます」[4]。「人間の自由はもろい」[5]とは言え、自由は人間一人ひとりの守るべき本質的善であり続けます。神こそ、第一に自由を尊重し、愛する御者です。「神は奴隷ではなく子供としての私たちをお望み」[6]だからです。

3.「罪が増したところには、恵みは なおいっそう満ちあふれました」 (ローマ5,20)。恵みと共に、新し い、そしてより崇高な自由が生まれ ました。それによって、「キリスト はわたしたちを自由の身にしてくだ さったのです」(ガラテア5,1)。主 は、贖いの力を持つ御言葉と御業に よって、私たちを罪から自由にして くださいます。「カトリック信仰の 神秘のいずれをみても、このように 自由を称えています」[7]。イエス・ キリストが私たちの生活の中心にお いでになることが必要であること

を、繰り返し思い出してもらいまし た。自由のより深い意味を見出すた めには、主を観想しなければなりま せん。私たちは、純粋な愛によっ て、私たちと同じ肉体をとり自らを 無とされた神の自由に驚くことで しょう。私たちのために、地上の歩 みにおいて十字架の生贄へと向けら れた自由だったのです。「わたしは 命を、再び受けるために、捨てる。 (…) だれもわたしから命を奪い取 ることはできない。わたしは自分で それを捨てる」(ヨハネ10,17-18)。 主の十字架における奉献ほどの深い 自由の行為は、人類史上かつてな かったものでした。主は「愛に動か されて、進んで自由に、自らを死に お渡しになった| [8]のです。

聖ヨハネの福音書は、主を信じた 人々となさったイエスの対話を語っ ています。その言葉の中で、Veritas liberabit vos、「真理はあなたたち を自由にする」(ヨハネ8,32)という 約束が力強く響いています。聖ホセ マリアは自問しました。「生涯をつ らぬく、この自由の道の始まりであ り、終わりである真理とは、一体ど のような真理のことでしょう。神と 人間の関係を知れば当然もちうる、 喜びと確信に満ちた答えを要約して みましょう。ここでいう真理とは、 私たちが神の御手から生まれ、至聖 なる三位一体の深い愛の対象とな り、かくも偉大な御父の子になった ということです。この真理をよく自 覚し、日々味わう決心ができるよ う、主にお願いしましょう。そうす れば、自由な人間にふさわしい生き 方ができます」[9]。

4. 神との父子関係のおかげで、私たちの自由は神の力を得て大いに適応範囲を広げます。私たちが自由になるとは、父のお住いから独立することではなく、神の子としての身分を大切に受け入れることなのです。「神の子であることを知らない人

一人ひとりに向けられた神の愛 (1ヨハネ4,16参照) を信じるなら、愛をもって応えることができます。私たちは愛することができるのです。 4 (1ョハネ4,10参照)。神は、私たちが自分に対する以上に、私たちに親密な方です[11]。神の無限の愛は私たちの存在の始まりにおいてだけでなく、あらゆる瞬間に見出すことがで

きることを知っているなら、心は確 信で満たされます。神は人々の中 で、私たちを待っておられるだけで なく(マタイ25,40参照)、私たちを通 してすべての人の生活に現存するこ とをお望みです。この事実を考える と、私たちは神からいただいたすべ ての賜物を携え、人々に与える努力 をすることでしょう。子供たちよ、 私たちは自らの人生において多くの 愛を受けてきました。今も受け続け ています。神を愛し、人々を愛する ことは、自由のもっとも固有な行為 です。愛は自由を《実現させ》、自 由を《贖い》ます。つまり、自由 は、愛のおかげで、本来の起源と目 的を神の愛のなかに見つけることが できます。「自由が本当の意味をも つのは、救いをもたらす真理を得る ために使うとき、あらゆる種類の奴 隷状態から解き放つ神の無限の愛 を、疲れをいとわず求めときなので す」[12]。

というわけで、神の子としての意識 (感覚)は、偉大な内的自由へ、深 い喜びへ、さらに希望から生まれる 落ち着いた楽観へと、導いてくれま す。それは、「希望をもって喜ぶ」 spe gaudentes (ローマ12,12)ことで す。神の子であることを知ると、世 界を愛するようになります。世界は 父なる神の御手から出た善いもので す。さらに、善を行い、罪に打ち勝 ち、世界を神のもとへ導くことがで きるという明確な自覚をもって、人 生に立ち向かうことができます。こ れについて、フランシスコ教皇は聖 母を見つめながら語っておられまし た。「キリスト者の自由は罪からの 単なる解放以上のものであること を、私たちは恵みに満ちたマリアか ら学びます。自由こそ地上の物事を 霊的な新たな光で見ることができる ようにしてくれます。純粋な心で神 と兄弟たちを愛するための自由、キ リストの御国の到来を喜びにみちた

希望に包まれて生きるための自由なのです」[13]。

## 心あるいは精神の自由

5.いかなる強制も受けずに自由に振る舞う。これは、人間の尊厳だけでなく、それ以上に神の子としての尊厳に固有な特長です。同時に、「単に恣意的な自由ではなく、自由にを認めることでする善を認めることです。 5.いかなる強制も受けずに自由に振るは、それ以上に神の子として、同時に、「単になる事に、自由になることです。

ここで、少し立ち止まって《心ある いは精神の自由》の重要性について 考察したいと思います。この表現 は、しばしば、気紛れな振る舞い や、いかなる規範にも反抗する態度 の意味で使われることがあります。 しかし、私はそのような曖昧な意味 で使っているのではありません。全 ての人々の自由は、わたしたちが通 常負っている義務や自ら結んだ(家 族、職業、市民社会における様々 な)約束によって、具体的に制限さ れています。しかし、(それら義務 や約束を) 愛によって果たすなら、 すべてにおいて、常に、自由に、行 動できます。「愛しなさい、そし て、望むことを行いなさい」Dilige et quod vis fac [15]。真の心の自由 とは、常に愛によって行動する能力 であり、習慣的な態度のことです。 特に、各々が置かれた状況のもと、 神の要求に従う努力に表われる自由 なのです。

「私を愛しているか」(ヨハネ21,17)。主のこの問いかけに対する、独創性ゆたかな態度と常に受諾する心構えを伴った自由な応答、でれがキリスト者の生き方です。ですから、「自由と献身は両立しないと考えるほど愚かなことはありません。献身は自由の結果として生まれます。たとえば、母親が自分の子供

のために自らを犠牲にするのは、自 ら自由に選択したからです。愛の大 小に比例して、自由の大小が決まり ます。愛が大きければ、多くの実を 結ぶでしょう。子供たちの善は、献 身を意味する幸いな自由と、本物の 自由である幸いな献身から生まれる ものです」[16]。

このような展望によれば、各自が自 中に振る舞うよう励ますとは、要求 を減らすことではないと理解できま す。自由であればあるほど、もっと 愛することができます。そして、愛 は要求するものであり、「すべてを 忍び、すべてを信じ、すべてを望 み、すべてに耐え」(1コリント13.7) ます。また、愛に成長するとは、自 由において成長すること、より自由 になることです。聖トマス・アクィ ナスの言葉によると、「愛が強けれ ば強いほど、より自由である」 Quanto aliquis plus habet de caritate, plus habet de libertate

[17]ということになります。また、 おる気がないことや、重荷に感じる ことを、愛ゆえに果たすなら、自ないに左右されず、自ないに左右で」果たででします。 ら、それは自由な心(精神の子と旨を もち、父なる神の御ませいなります。 たす熱意を持たなければなりません。 で事を運ぶ、これこそ最も超 然的な理由です」[18]。

れながらの性格とは関係なく、出来 事や状況の肯定的な面を見ることを引きいるとすらでは楽しむ」ことを与び仰れば、フランシスは、事びの創始する。「(聖霊は)を聖霊におります。「は主であります。「は主でないないは、私たちは自己の悲しみのとは、私たちは自己の悲しみのはないないない。

なってしまいます | [20]。

好きな仕事なら喜んで果たすことが できるという考えは、正しくありま せん」[21]。もし愛によって、愛を 込めてなされるのであれば、たとえ 骨の折れる仕事であっても、喜んで 果たすことができます。つまり、自 由に果たすことができるのです。 1963年4月28日、聖ホセマリアは、 声に出して祈った時、1931年に受け たあの光について話しました。「主 よ、御身は、十字架に出会うとは幸 せと喜びに出会うことであると理解 させてくださいました。今、もっと はっきりと分かります。十字架を抱 くとはキリストと一つになること、 キリストになることです。それゆ え、神の子となることなのです| [22]

7.神法のすべては、また、各自のための神の御旨のすべては、自由を抑圧する法律ではありません。反対に、福音のごとく、「自由をもたらす完全な律法」lex perfecta

libertatis (ヤコブ1,25参照)なので す。律法全体は愛の掟に要約される からです。愛の掟は、外的規則とし て愛しなさいと命じるだけではな く、内的恩恵として愛する力を与え ます。「私の重さは私の愛| Pondus meum amor meus [23]と聖アウグス チヌスが記しています。この言葉に よって、愛することはしばしば辛い 事だという明らかな事実について述 べているのではなく、私たちが心に 抱く愛こそが私たちを動かすもので あり、私たちをどこへでも行かせて くれるものであると述べているので す。「私は愛によってどこにでも、 愛が運ぶところに運ばれていきま す」Eo feror, quocumque feror [24]。一人ひとり個人的に自問して みてください。私をどこへでも行か せる愛とはどのような愛なのかと。

心に働きかける神の愛に自己を委ねる人は、自由と献身は対立するものではないことを自ら体験します。

「自由と献身は決して矛盾するもの ではない、かえって互いに助け合う ものである。愛があってこそ、自由 を捧げることができます。愛がなけ れば、自由を捧げることはできない のです。当たらずといえども遠から ず式に言葉をもてあそんでいるわけ ではありません。自ら進んで献身す るなら、献身は自由の結果ですか ら、一つひとつの献身の行為が愛を 新たにすることになります。そし て、献身を新たにするとは、若さと 寛大さを失わず、大きな理想をもち 続け、大きな犠牲を払う力を維持す ることです」[25]。それゆえ、神へ の従順は自由な行為であるのみなら ず、自由へと解き放ってくれる行為 でもあるのです。

イエスは弟子達に、「私にはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われました。「私の食べ物とは、私をお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることであ

る」(ヨハネ4,32-34)。イエスにとって、御父に従うことは食物でした。つまり、活力を与えるものだったのです。同じように私たちにとっても、聖ヨハネ・パウロ2世が説明るされたように、イエスの弟子であるく結びつき、イエスの大格そのものに固命にあずかり、御父の意志に対するイエスの自由で愛をこめた従順を共有」[26]することなのです。

ベネディクト16世は自由と献身の緊密な関係を掘り下げて語られまイエリンにあたり、で調査を掘りではあた。「御父にがで自覚のとは愛に動かされて自由をイエスをです。ではあるです。ではあるですが、は変にない。ではいましたがです。このおいまではない。このようなは自由の内容を《満たした》の

です。そうしなければ、自由とは、何かをすることもできれば、しないこともできるという《空虚な》可能性にとどまったことでしょう。

人生そのものと同じように、自由は 愛によって意味を与えられます。 (…) それゆえキリスト者の自由 は、自分の思いのままに振る舞うこ ととはまったく異なります。キリス ト者の自由とは、十字架上の犠牲に 至るまでご自身をささげたキリスト に従うことです。逆説的に思われる かもしれませんが、主はご自身の最 高の自由を十字架上で体験しまし た。なぜなら十字架は愛の頂点だか らです。人々はカルワリオで叫びま した。『神の子なら、十字架から降 りるがいい』。主はまさに十字架上 に留まることによって、子としての 自由を示しました。それは、御父の 慈しみ深い御旨を完全に成し遂げる ためでした」[27]。

「主よ、あなたが私を惑わし、私は 惑わされてあなたに捕らえられまし た。あなたの勝ちです| (エレミヤ 20.7)。預言者エレミヤのこの祈りに は、なんと多くの思いが含まれてい ることでしょう。たとえ苦しみが伴 うとしても、自己の召し出しを一連 の義務としてではなく、神のたまも のとして受け入れるならば、それも また、心の自由の表われであると言 えます。神はあるがままの私たちを 愛されていると知ることは、なんと いう素晴らしい解放になることで しょう。神は、まず私たちが神の愛 を受け入れるようにとお招きになる のです。

8.心あるいは精神の自由とは、有りもしない義務に縛られないことも意味しています。個人の自由なイニシァティブに関わる生活上の細々とした事柄については、柔軟な態度で放棄したり変更したりすることができるということです。20年前にド

オプス・デイにおいて、信頼と自由 な雰囲気を常に保たなければなりま せん。この雰囲気があれば、私たち の心配事や理解できていないこと、 改善すべきだと思える事柄を、私た ちを導く役目を有する人に言い表す ことが容易になります。同時に、人 間的な限界や困難などを、落ち着い て朗らかな心で耐え忍び、誠実さと 忍耐を実行するならば、この信頼と いう雰囲気はさらに深みを増しま す。これは良い子どもの振る舞いで す。良い子なら、自由を行使するに

あたり、自分に理があると信じていても自分自身の見方よりもさらに大切な善、つまり家族の一致や平和という真に貴重な善を優先させます。 反対に、「人々から孤立したり、兄弟との一致や交流を断ち切ったりすることがあれば、それこそ神の精神に沿って行動していないことを示す明らかな証拠です」[29]。

9.状況によっては苦しむ時もありま すが、神はしばしばその状況を私た ちがイエスと同化するために役立た せてくださいます。ヘブライ人への 書簡に記されているように、イエス は「多くの苦しみによって従順を学 ばれ | ました(ヘブライ5,8)。それに よって、「御自分に従順であるすべ ての人々に対して、永遠の救いの源 と | (同5.9) なったのです。こうして 私たちに神の子の自由をもたらして くださいました。誰もが持っている 人間的な限界を克服するために、諦 めずに出来る限りの努力を尽くし

て、その弱さを受け入れることもま た、心の自由の表われであり源泉で す。このような態度とは対象的な、 放蕩息子のたとえ話の兄の悲しい行 い (ルカ15,25-30) について考えてみ てください。彼は心の中に苦々しい 思いを溜め込み、父に対して怒りを ぶつけました。そして、家族の喜び に溶け込むこともできなかったので す。彼の自由は、次第に小さく、利 己的になり、愛することができず、 「私のものは全部お前のものだ」(ル カ15,31) という父の言葉も理解でき なかったのです。自分の家に住んで いましたが、自由ではありませんで した。彼の心はそこになかったので す。

一方、モアブ人ルツの物語はまことに対照的です。自由と献身が家族への深い帰属意識に根差していることが分かります。彼女の姑が、人生をやり直しなさいと、しきりに勧めた時のルツの答えには感動します。

「あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください。わたしは、あなたの行かれる所に行き、お泊りになる所に泊まります。あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神。あなたの亡くなる所でわたしも死に、そこに葬られたいのです」(ルツ1,16-17)。

聖母を見つめるならば、自由は忠実 な献身において、さらに真価を発揮 することがはっきりと分かります。 「大天使がいと高き御者の計画を聖 マリアに告げたその荘厳な瞬間につ いて考えてみましょう。私たちの御 母はまず耳を傾け、次いで、主の要 求をさらに深く理解するために質問 なさいます。その後、きっぱりと、 『お言葉の通りにこの身になります ように』fiat! (ルカ1,38)、とお答え になりました。これこそ、最高の自 由が結ぶ実り、つまり神に自らを捧 げる自由です」[30]。

10.形成においては個人的な霊的指導 が重要な役割を担っています。それ は、常に自由な雰囲気の中で行わ れ、人々が「鳥のように自由であ る | [31]と感じるよう導く必要があ ります。聖ホセマリアは、兄弟の打 ち明け話を聴く人々に関して、次の ように記しました。「霊的指導にあ たる者の権威は権限ではありませ ん。どうか人々が心の大いなる自由 を感じるようにしてください。これ まで幾度も繰り返したことを考えて ください。《自ら望む》、これこそ もっとも超自然的な理由であると思 います。霊的指導者の役目は、人々 が神の御旨を果たしたいと望む、自 ら望むよう助けることです。命令す るのではなく、助言を与えるので す」[32]。霊的指導の助言によっ て、一人ひとりの霊魂における聖霊 の働きを支え、各々が神の御前に自 らを置き、自由と責任をもって自己

の義務に向かい合うよう助けるのです。「人間を創造する時、神は二人として同じものをお造りにはなりません。一人ひとりは特別な存在です。神が創造された通りに、そして、神がお導きになる通りに、人々と接すべき」[33]です。

通常は、助言と共に愛のこもった勧 告を与えることができます。この勧 告によって、愛ゆえに自由な心で忠 実を保つためには、どのようなとき も努力する《価値がある》ことが容 易に納得できるでしょう。霊的指導 においても、時には、はっきりと、 しかし常に愛情と細やかさをもって 《命令的助言》を与え、特定の義務 を果たすべき事を思い出させること もできます。しかし、この助言の力 は、助言そのものにではなく、その 義務自体が有する力です。信頼関係 があれば、そのような話し方ができ るだけでなく、そうすべきです。注 意を受けた人は、そのような助言の

与え方に、年長の兄弟の剛毅と愛情 を認めて感謝することでしょう。

11.要求する必要性を疎かにすることなく、生涯にわたって提供される形成には、《展望を開く》という重要な面があります。もし、要求されることだけで終わるなおもとだけに目を留めたことだけに目を留めたり、私たちを愛する神の愛とも大切なことを忘れる恐れがあります。

このようなことについて、聖ホセマリアがどのように教えていたかをに教えていたデイにもしまう。「オプス・デインはいて、私たちは心から自由をもにおいてす。図式や方式に縛り付けられてです。図式や方式に縛り付けられてです。この生活において広になりで決める領域は実に広広ので、合うで決める領域は実に広広のです。それは良い事なので、広気のです」[34]。それゆえ、霊的

指導において、誠実であれば、助言を受け入れるために自由に心を開くだけでなく、イニシァティブをとって考え、イエス・キリストとますます深く同化(一致)するための、内的戦いの焦点と思える点を、自由に打ち明けることでしょう。

それゆえ、皆に同じ精神を伝えるための形成は、画一性ではなく、一致を生み出します。聖ホセマリアは分かりやすく次のように説明していました。オプス・デイにおいては、

ようなものであって、私たちの存在 の上に立つものではなく、私たちに 生命を与えるものです。各自の土地 に蒔かれ成長すべき種子のようなも のなのです。

12.形成においては、安全であり確実 であることを過度に望むならば、心 を委縮させ、私たちを小さくしてし まいます。「キリストに出会った人 は自分の環境に閉じ籠ることができ ない。そんなに小さくなるなんて悲 しいことではないか。自らを扇子の ように開いて、すべての人のもとへ 行かなければならないのだ」[36]。 というわけで、間違いを恐れず、能 力の不足にも怖気を震わず、逆境に も臆することなく生きる必要を確信 できるよう、また、超自然的見方を もって、賢明かつ大胆に、自分が属 する社会と職業上の環境に積極的に 参加できるよう、自己を形成するこ とが重要です。

自由への愛は、それゆえ、使徒職に おける自発性と自主性にも表われる ものです。自発的な使徒職は、依頼 された具体的な使徒職の務めと両立 します。「私たちの使徒職は、とり わけ個人的な使徒職である」[37]こ とを、常にはっきりと自覚しておく ことが大切です。同じことは、ディ レクターたちが使徒職活動を推進す る際にも当てはまります。「私はあ なたがたを決して縛りたくないので す。それとは反対に、あなたがたが 大いなる自由をもって行動できるよ う努めてきました。あなたがたの使 徒職においては、私たちの精神が示 すとても広い枠の中で、それぞれの 場所、状況、時に配慮して、それぞ れの環境にもっとも合致する諸活動 を見つけ出すために、イニシァティ ブを発揮してください」[38]。

13.自由への愛は、属人区長とその代理の任にあたる人々が、それぞれの 委員会の協力によって行う、司牧上 の統治においても見られます。聖ホセマリアの次の言葉をもう一度、感謝を込めて、読み返しましょう。

「この自由への精神の帰結のひとつ は、オプス・デイにおける形成、そ して統治が、信頼を基礎としてする という点です。 (…) 信頼を基礎と しない統治では、何事も達成できま せん。反対に、人々を尊重して神の 子としての真の聖なる自由を発展さ せるよう、また自らの自由を行使す るよう教えるなら、命じ、形成を与 えることによって、豊かな実を結ぶ ことが出来ます。形成を与え、統治 するとは、愛することなのです| [39]。

尊敬を込めて人々に命じるとは、第一に、統治と霊的指導を混同することなく、良心の内面性(プライバシー)を繊細な心で尊重することです。第二に、この敬う心によって、命令と、命令ではない適切な勧告、助言あるいは勧めとの違いを明確に

区別すこと。そして、第三として、 三番目であると言っても重要なこと ですが、人々を信頼して統治すると は、常に出来る限り関係者の意見を 考慮するということです。統治に出 たる人々のこの態度、他人の意見に たる人々のこの態度、他人のデイが ないまであることを見事に表していま す。

さらに、オプス・デイでは、自由に 意見を述べ得る経済・政治・神学な どの諸問題について、完全な自由を 享受しています。これは、感謝すべ き経験です。「信仰に属さない事柄 について、一人ひとりは、完全な自 由と自己の責任において、望むまま に考え、行動します。意見の『多様 性』は、一人ひとりの自由と責任を 尊重する精神から(論理的にも社会 学的にも)当然の結果として生まれ てくるものであって、オプス・デイ ではいかなる問題を引き起こすこと にはなりません。それどころか、意

見の多様性はかえって良い精神の表われなのです」[40]。この多様性を厄介に思うかもしれませんが、愛され育まれるべきものです。自由を愛する人は、様々な分野における他の人々の考え方や振る舞い方に肯定的で愛すべき面を見出すことができます。

実際の統治の什方に関して、聖ホセ マリアは、《団体的あるいは連帯的 統治》を定め、常に力を込めて思い 出させました。この団体的(連帯 的)統治は、オプス・デイの生活に 浸透している自由の精神のもう一つ の表われです。「様々な時に幾度も 繰り返し、また私の生涯を通してこ れからもさらに繰り返したいと思っ ていることがあります。オプス・デ イにおいては、あらゆるレベルで団 体的統治を要求します。独裁に陥ら ないためです。これは賢明さの表わ れです。団体的統治によれば、案件 は簡単に研究され、誤りの修正も効

果的に行われ、すでに順調に発展している使徒職の活動はよりいっそう効果的に完成へと向かいます」 [41]。

団体的統治は意思決定をするための 単なる原則でも主たる制度でもあり ません。それは何よりもまず一つの 精神です。すなわち、私たちの意見 を改善し、変更するために助けとな る光や情報などを他者から受け取る ことができ、また、受け取る必要が あるという確信に根ざした精神なの です。同時に、そのこと自体が正 に、自らの考えを自由に表明するこ とができるよう他者の自由を尊重す ることです。いやそれ以上に、自由 を積極的に奨励することになりま す。

## 使徒職における自由の尊重と擁護

14.使徒職は、人々をイエス・キリストと出会わせたい、あるいは、より深い親しさへ導きたいという、誠実

な望みから生まれます。「人々に対 する私たちの態度は、使徒パウロの 叫びとも言える次の言葉に要約でき ます。『わたしの愛が、キリスト・ イエスにおいてあなたがた一同と共 にあるように』caritas mea cum omnibus vobis in Christo Iesu! (1⊐ リント16,24)。愛によってあなたが たは、キリストが尊び勝ち取ってく ださった (ガラテアア4,31参照) 個々 人の自由を尊重し、擁護することに よって、この世において平和と喜び の種まき人となることでしょう| [42]

聖ホセマリアは、私たちが証と言葉によって友情と打ち明け話の使徒職をするよう招いています。まけるをの使徒職を通して、主に近づは由をでいる人々の自由をでいる人をでは、「使徒職の活動においても、いやむしろ使徒職の活動においたと、強制されたと感じるこそ、強制されたといのです。神

は人々が自由に従うことをお望みです。それゆえ、《人々の良心の自由》を尊重しない使徒職は正しいものではありません」[43]。

真摯な友情はお互いを誠実な愛情で 結びつけます。それは、自由と相互 のプライバシーを真に擁護すること です。使徒職は友情の付け足しとし て行われるものではありません。す でに書き送ったことですが、「使徒 職をするというのではなく、私たち 自身が使徒なのです!」[44]。友情 それ自体が使徒職です。友情そのも のが互いに光を与え合う対話です。 その対話において互いに視野を広げ 合い、様々な計画が生まれます。対 話によって良いことを共に喜び、困 難において互いに支え合います。神 は私たちが喜んでいることをお望み ですから、その対話において楽しい 時を過ごすことができるのです。

15.周知のように、proselitismo「使 徒の獲得しという言葉の本来の意味 は、肯定的なものです。それは、福 音を広める使命を表わす言葉です [45]。聖ホセマリアは常にそのよう に理解し、最近になって指摘されて いるような否定的な意味では使って いませんでした。いずれにせよ、言 葉というものは、私たちが望まなく ても、しばしば本来の意味とは異な る内容を与えて使われることがある ので、注意すべきです。話の前後関 係(や状況)に応じて、この言葉を 使うのが適切かどうかを判断してく ださい。あなたがたの意図とは異 なった意味で理解される恐れが時と してあるからです。

また、誰かにオプス・デイへの神の呼びかけ(召し出し)を提案する際には、さらに注意深く、すべての人の自由を尊重し擁護する必要があります。その自由とは、望む人と相談する自由、とりわけ、自分の召し出し

の可能性を見極め、そして決定する 際の完全な自由のことです。聖ホセ マリアは、compelle intrare「無理に でも連れて来なさい」(ルカ14,23)と いう、福音書のたとえ話の強い言葉 について解説して、次のように書い ています。「すべての人の個人的自 由を尊重することは私たちの精神の 本質的特徴ですから、使徒の獲得に おいてあなたたちが実行すべき compelle intrareは、物理的に無理強 いすることではありません。それ は、豊かな光と教理、あなたがたの 祈りと教えの正しさを証しするあな たがたの仕事という霊的刺激、あな たがたが捧げる多くの犠牲、神の子 であるあなたがたが湛える微笑みの ことです。神の子であることを自覚 しているなら、たとえ人生に苦しみ が欠けることがないとしても、穏や かな幸せに満たされます。そして、 人々はそれを見て羨むことでしょ う。これらのことに、あなたがたの 優雅さや親愛の情が加わるなら、そ

れこそcompelle intrareの意味することなのです」[46]。神と共に生きるという目もくらむような美しさを、毅然とした態度で、単純に示しつつ、オプス・デイはこれからも自由な雰囲気の中で成長し、成長して行かなければならないことは明らかです。

\*\*\*

16. 《Veritas liberabit vos: 真理はあなたたちを自由にする》(ヨハネ8,32)。歴史の中に生起する自由への数々の約束は、神と人間についてで動力であると言えます。この《真理》とは一人の人格、道であり真理であるイエスです(ヨハネ14,6参照)。「キリストは二千年後の今日も、真理にもとづく自由を制限にもたらす方です。この自由を制限し縮小するもの、並びにその自由の根源において、人間の魂において、人間のれたちがある。

心において、良心において、自由を破壊する恐れのあるものから人間を自由にする方として、キリストは私たちの前に立っておられます」 [47]。

神は永遠に続く自由を私たちにお与 えになりました。このたまものは、 この地上で生きている間だけ行使す るような、過ぎ去るものではありま せん。自由は愛と同じく、《決して 滅びない》(1コリント13.8)ので す。天国においても続きます。私た ちの天国への道程は、まさにin libertatem gloriæ filiorum Dei「神の 子供たちの栄光に輝く自由| (ロー マ8,21) へと向かう道なのです。天 国において、自由は無くならないだ けではなく、その完成に至ります。 それは神の愛を抱くことです。 | 天 では偉大な愛があなたを待ってい る。裏切りも欺きもない、愛そのも の、美そのもの、偉大さそのもの、 知恵そのもの…。しかも、うんざり

させない。すなわち、飽かせることなく満足させ、いくらでも欲しくなる愛が待っている」[48]。私たちが忠実であるなら、神の慈しみによって、私たちは天国において愛の充満である自由を満喫することでしょう。

心を込めて祝福を送ります あなたがたのパドレ

フェルナンド

ローマ、2018年1月9日、聖ホセマリ アの生誕記念日

[1] 聖ホセマリア、手紙1954年5月31 日22番。

[2] フランシスコ、使徒的勧告『福音の喜び』2013年11月24日170番。

- [3] 聖ホセマリア、手紙1965年10月 24日3番。
- [4] ベネディクト16世、回勅『希望による救い』2007年11月30日24番。
- [5] 同上。
- <u>[6]</u> 聖ホセマリア、『知識の香』129 番。
- [7] 聖ホセマリア、『神の朋友』25番。
- [8] 聖ホセマリア、『十字架の道 行』第10留。
- [9] 『神の朋友』26番。
- [10] 同上。
- [11] 聖アウグスチヌス、『告白』Ⅲ,6,11参照。
- [12] 『神の朋友』27番。

[13] フランシスコ、説教、2014年8 月15日。

[14] ベネディクト16世、回勅『真理 に根ざした愛』2009年6月29日68 番。

[15] 聖アウグスチヌス、『ヨハネに よる福音書講解』VII, 8。

[16] 『神の朋友』30番。

[17] 聖トマス・アクィナス、『命題 集注解』In III Sent., d. 29, q. un., a. 8, gla. 3 s.c. 1.

[18] 『知識の香』17番。

[19] 聖ホセマリア、手紙1954年5月 31日22番。

[20] フランシスコ、説教2013年5月31日。

[21] 聖ホセマリア、手紙1947年12月 29日106番。

- [22] 聖ホセマリア、ある説教でのメ モ1963年4月28日。
- [23] 聖アウグスチヌス、『告白』XIII, 9, 10。
- [24] 同。
- [25] 『神の朋友』31番。
- [26] 聖ヨハネ・パウロ2世、回勅 『真理の輝き』1993年8月6日19番。
- [27] ベネディクト16世、お告げの祈りでの演説2007年7月1日。
- [28] ハビエル・エチェバリーア、司 牧書簡1997年2月14日15番。
- [29] 『知識の香』17番。
- [30] 『神の朋友』25番。
- [31] 聖ホセマリア、手紙1951年9月 14日38番。

- [32] 聖ホセマリア、手紙1956年8月8 日38番。
- [33] 同。
- [34] 聖ホセマリア、手紙1957年9月 29日70番。
- [35] 聖ホセマリア、手紙1945年2月2 日19番。
- [36] 聖ホセマリア、『拓』193番。
- [37] 聖ホセマリア、手紙1939年10月 2日10番。
- [38] 聖ホセマリア、手紙1942年10月 24日46番。
- [39] 聖ホセマリア、手紙1945年5月6 日39番。
- [40] 聖ホセマリア、『会見』98番。 (邦訳は『女性―ホセマリア・エスク リバー師との会見―』62頁)。

- [41] 聖ホセマリア、手紙1951年12月 24日5番。
- [42] 聖ホセマリア、手紙1933年7月 16日3番。
- [43] 聖ホセマリア、手紙1932年1月9 日66番。
- [44] 司牧書簡2017年2月14日9番。
- [45] 教理省、『福音宣教のいくつかの側面に関する教理的覚え書』2007 年12月3日12番と49番参照。
- [46] 聖ホセマリア、手紙1942年10月 24日9番。
- [47] 聖ヨハネ・パウロ2世、回勅 『人間の贖い主』1979年3月4日12 番。
- [48] 聖ホセマリア、『鍛』995。

## Copyright © Prælatura Sanctæ Crucis et Operis Dei

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/zokujinkuchono-tegami-2018-1-9/(2025/11/24)